

出でたりたり此度の勝利開くは大喜び國王より李
舜臣は一品の位を加へるとはなほいふありの恩賞を
こと評議ありて正憲大夫品ニの位は陞り李億祺元均何
れ嘉善大夫品ニは陞りたり是より李舜臣ハ三道慶尚
全の大船軍と引率し閑山島に在陣し敵軍の西小下る路
とさくはけり

筑紫上野の攻熊嶺之事

日本筑紫上野の廣門軍勢を率ゐて全州に乱入し熊嶺に
攻寄たりし其の處ハ重くは柵と振りたり筑紫の若何程
の事ありむと敵を見慢り攻支度とも用意せん只一擧

は探り落しむと攻登る城兵共寄手を目の下の見あり
て指詰り引詰散り射る筑紫の勢若干付れ進り得る寄手
一と先山下より引退き一と息つきくる城中も追慕ふ程の
勢いなりと見えり只城壁柵内と守りたる計りなり廣門
後隊の益手勢と雜りて更に進むる攻登る城中矢種盡
る哉と見えり射出し矢最初と違ひたりしり寄手
氣を乗し曳くと聲と出り攻上る此城やと攻落されぬ
づく見えり處城兵も必死と思ひ極めりるや城門と
剛き打て出寄手の勢と大より戦はると云へども和軍の勇
猛は比らざるも有されり城將も戦死し士卒も過半討れ

て大に潰れて城中一逃げ入た少寄手その時追はるる
 攻入たば忽ち落城と云きる後紫旗も終日の戦ひ身疲
 り氣も屈せしうば廣門も士卒と後へ引取少前日上野
 八廣門重て山下は押寄たさるる城のやうに前日と違ひ
 いのさきまも後詰の荒平入来りて籠るる俵も林本
 の間は旌旗等見と夜ハ篝火と焼き連ねたれハ寄手も昨
 日此戦い少くお跡多く討り上たれハ是等も見あぶ
 氣おろししとさきバ敢て攻る度も能く物見たり出
 きて窺りしめ數日守りつゝ居たりといふれも城
 中多勢も成り而も荒手加さるたりと見るとさきハ所詮

敵いざがんと思案となり終に陣を拂ひて引退く城
 兵も敢て追慕はざりしと云ふハ廣門も安くと引取るる

朝鮮時敵の軍勢慶尚右道より全州の界入りたる故
 金提の郡守鄭湛海靛の縣監邊應井等熊嶺よりこれを禦
 く木柵を結ひて横さるる山路と断ち切り將士を指圖し
 終日大に戦ひ敵軍を射殺し事數と知らぬ敵既不退ん
 びや一日暮矢盡きしうば敵勢いと得て更に進むる攻
 たりくれば鄭堪邊應井俱に討死し士卒も散るる成行ぬ
 明日敵全州に至るれば官吏走らむとけしる全州の人
 前の典籍李廷鸞と云者城に入り吏民を倡ひ呼いて固く

守にけるが此時敵の精兵も昨日の熊嶺の戦ひも多し討
 死し氣力も已に盡きしありしに監司李洸が計より又疑兵
 と城外に設け晝は多しの旗幟を立夜は炬火と列ねて山
 は満しむ敵も城下に到りしれども數篇環を視て敢て攻
 めざる去るも少し熊嶺にて戦死せし朝鮮勢の屍と悉く聚め
 て路邊に埋めしありし大なる塚と化して木と其上に立て
 吊朝鮮國忠肝義膽と云文字と書附たり是蓋し其力戦と
 嘉し之也是より由て全羅の一道ハ全き度を得たり

小西行長於平壤與朝鮮諸將迫合戦之事

日本 文禄元年 明の萬曆二十年 八月朔日 小西行長等、楯籠りし

平壤城は朝鮮勢四千餘騎より押寄たり城中より軍
 勢と出でて戦ふむ朝鮮勢の内より精兵の射矢と探む
 て和軍と射さるるは行長が先年の士卒矢庭は十餘人
 矢小中を殪る是は怖れ進み得ば猶預してありし處
 城中より後軍の多勢馳せ來り一度は嚏と突懸る能横
 無碍は切まらるるは朝鮮勢若干討せし立見たり順安
 きて引返るる味軍も長追せし人数とまらるる城中に入
 りしなり

朝鮮 八月初一日 巡察使李元翼 巡邊使李贛等兵を率ゐ進
 むる平壤を攻むるが勝利なりして引退く時李元翼ハ

李賞と共ニ數十人の兵と率ゐ順安ニ在陣一別將金應瑞
 等龍江ニ和龍山江西四邑の軍と率ゐて二十余屯と化す
 平壤の西ニある金億秋ハ水軍と率ゐ大同江の下流ニ
 了以て持角の勢いとありぬ木の日元翼等平壤の城北よ
 了兵と進め敵の先鋒より行遇二十餘人の敵と射たせ
 が既よりて敵大勢馳来りたれハ軍士共驚き散り成り
 江邊勇力の士卒負討死多しをければ遂に引返して順安
 屯せり

小西行長與沈惟敬會談之事

日本 九月朔の遊撃將軍沈惟敬と云者順安に到りて書と

小西行長は馳せて問ふ朝鮮何の虧負らるる有て日本何
 が擅に師旅を興ひ哉と行長其書を見て即ち回報し面を
 見らるる事と議せし事と述べあれし因て日を約し沈惟敬
 出来りし故行長義智兼長老等と伴ひ出て城址十里
 の一の外に會ひ推敬は告るる太閤朝鮮を征らるるの故と
 以り推敬乃ら行長と和好と議し因て約らるる吾歸る
 明朝小報し取計ふ道有づ一五十日と限期し及び其間
 日本人平壤西北十里の外に出で槍掠らるる度勿し又朝鮮
 人も十里以内に入て日本人と争ふ度勿しと乃ち地界を
 木と立て禁標とせり立別れ去るる少行長城に歸り兵

と歟めて働らば既りて五十日遯るれども惟教到らば
是よおんて行長義智大に攻城の具を修し軍兵を安んず
直ちに進む事と欲しけり

朝鮮九月明朝の遊撃將軍沈惟教朝鮮に来る是より
祖承訓既に敗軍敵愈驕りたるより書を朝鮮に送る中
は群羊放一帯の治らば是ハ群羊と明兵を喻一帯を以て
自らふたと金篋する詞を朝夕西に改下ししむる
由を聲言けしハ義州の人皆家財を荷たきて立居たる計
あり沈惟教ハ本浙江の民なりと兵部尚書石星以為日本
乃情と諳し下ししむる遊撃將軍の号を假して遣りけ

るなり沈惟教既に順安に至る時日本の変災猝に發り
且人と殘い苦志しむる甚志くれむ人と揣れ思はせり
日本の軍營を窺ふ者なり沈惟教黄いろの袂に書翰を裹
み家丁一人に背負はせ馬に騎り直ち順安の普通門よ
り入る書翰を日本の將に送る行長其書を見即回報一面
談さる克と議せむと云送るるハ沈惟教將に生むるハ
人皆これと危ぶみ止むる者多し沈惟教笑て云彼等が我
を害せしやとく三四人の家丁を後へてこれに赴く行長
義智玄蘇等盛に兵威を陳ね出て城北十里の外降福山の
下は會し朝鮮の軍兵共を大興山の上は登り望し見れり

日本の軍勢果てく、劔戦雲の如く光りて、やき立をばし、
る。沈惟敬馬よとひて、日本の陣中に入る。日本人群集志
て四面を水圍し、ゆるゆと拘執らる。やと疑ふ。日暮り
沈惟敬還る。来りぬ。沈惟敬日本人と約し、我明を還る。報
かば當りしに取計ひある。一日數五十日と以て期せ
む。日本勢平壤の西十里外に出で、犯し掠む。夏無る。一
羽鮮人も十里内に入りて、日本人と闘ふ。と云ひ、堅め乃
ち男目と木と立て、禁標として去る。あいのりする事と後
た。や羽鮮人測る者る。とけし。

征韓記曰、沈惟敬者亡命無頼之人也、嘗潛来于日本、被知

於行長、歸國之後、通于吳妓陳澹如、澹如僕有、鄭四者、數年
以前赴日本而被執、是年逃歸、逢惟敬而詳語日本之事、惟
敬為人頗有所志、聞鄭四言、謂方今大明動干戈、以防日本、
當此兵乱、吾將樹勲功、矣即赴京師、揚言曰、我能知日本之
事、時司馬石星掌朝鮮之事、其妾文表、茂偶遊澹如之宅、聞
惟敬之言、而薦之於石星、石星召惟敬而語、大喜曰、吾得入
也、祖承訓敗軍之後、石星謂不起大軍、則與日本相戰、尤難
乎、因之先遣惟敬、說和好之議、而後欲聚大兵、惟敬請金錢
貸于石星、曰、以此賄于日本諸將、而結和親、議石星聽之、於
是惟敬散千金、買蟒衣玉帶花幣、而入朝鮮、先遣人于平壤、

挑行長之意行長素喜和議與推敏會于乾伏山麓推敏極陳和好之為善行長標題七箇條曰若悉可之則吾從和親之謀矣推敏先皆同之是故行長及諸將皆信推敏之言待其報至而欲撤平壤之戍增田長盛石田三成大谷吉隆之皆如此故不放朝鮮諸城唯贖為消日也行長贈書於推敏其趣曰日本絕勘合船既久矣是以秀吉數年雖求和親于朝鮮而朝鮮不應日本之望故秀吉勃然進節旄鷄林也今足下來于平壤以欲結奏和交是國家秉平之基乎且下奏明帝遣官使于日本為交親之左券則何幸加之為官使若來則以五十日為期矣惟敏歸大明雖報之不徑臣之衆

議則其事未決

宇喜多秀家攻落朝鮮之事

日本 宇喜多秀家ハ京城の守に在りし頃、京畿道の新監司京城を取返さしむと計畧を廻り或ハ捕とある又ハ倭軍に降つて城中に在る者共と言ひしを先返す忠と云ふ一めんといひ人々を城中に入らせり理と説せしは是れ一味とある者數百人に及び或ハ倭軍の謀と知らしむると云ひ又ハ城中のやうとて通じしとて往來する者多しとの事からいなり即ち秀家も謀りて出来たり也降卒捕の中にて剛愎不頼の者より利と暗とめて味方の犬と

かくて敵の動靜を聞らるゝ或夜潛り監司の居所に朔寧
 郡を押寄て俄に門を破り鉄鉞を發ち喚き叫んで攻入
 りて恐びの者大に掛け焚立々バ朔寧郡の軍兵ども上
 へと騒動ひる處と備前の兵士共各片手打り難迴らん
 るゆゑ討つる者數を知らず寡軍より和を分けて追討さ
 一人も残りぬ討取らるゝまゝ朔寧を攻落しゆる上
 最早長追とゞゞるべとて速に諸將を打納り然る處に
 乱軍の中は監司討つる由聞らるゝば秀家士卒は下知
 して監司の首と大路に集り威をふるゝ

朝鮮 是年の秋權微が代りて沈公京畿監司となり義州

又住所に赴きぐる京畿道の難儀ハ他道より少し甚く敵
 軍日々に城外に出で所々を焚掠め静かなる所とてハ無く
 前後の監司及び守令以下悉く人知れぬ片遠所に身と忍
 び行列とも立てぬ微服して潛り往還し或ハ屢斂居と定
 めぬして以て敵の患を防ぎぬ沈公ハ敵を畏れぬこと
 び巡行度毎に先觸れを出し平日の如く旗と建角と鳴きて
 通行せし京畿道の軍兵と聚りて悉く我身は随一聲言
 々ると京城を恢復せしと致ふとて日よ人と城中に入
 て招き集め約束を設け内應となすむ城中の人事定
 りて後ち敵を組しやとの罪を獲むと恐りて連名書附

と以て監司の方一赴き内應せんと云出る者曰千百と
 以て數ふ管それく名目と附て曰く約束と聴くと曰
 く軍兵と出さしと曰く敵情と報らるなんどて人往
 来阻て無さく中ゆら敵の耳目となつて来り朝鮮の
 動静とくく者も多し相ひ離て出入さるれも沈岱大
 信とて疑ふべこの比沈岱朝鮮郡に在るるの敵是
 と伺ひ知り潜り大灘と渡り暗夜に來り襲ひ攻むれば沈
 岱驚きあつて衣服と肩に掛てま出る敵追はけるれと害
 り時軍官張姓なる者も同く死に敵退して後よ京畿の
 人權は朝鮮郡中殞れ數日となつて敵復て出て其

首と取了鐘樓の街れ上小懸けしや京城の人其忠義を哀
 り相ひ與り財物と率ひ來り守り居たる日本人は賂と以
 て贖ふり其首と出し函に納りて江華に送りぬ敵退て後ち
 骸と一處にて故郷に還り葬ふりしめり

忠州原州春川等在陣諸將與朝鮮軍迫合戦之事

日本日本の軍勢慶尚道より忠清道江原道と徑て追て京

畿に攻入りし時忠清道内原州道内釜山より京城一
 の要路なれば奉行の内忠州は八増田右衛門尉長盛原州
 小石田治部少輔三成在陣し京畿の驪州一通して京城
 一往来絶る事なるしけり然るも江原道の守將軍勢を催

驪州の龜尾浦より増田の勢と追合し及びくるは朝鮮
 勝利を得たる石田三成原州の陣より京城へ赴きくるは
 朝鮮勢精兵の射手とさくう立ちて驪州の馬灘より各船より
 取来り矢継ぎや散く射立れば石田軍勢矢庭は數
 十人射仆され大に潰れ敗軍は及びくるは茲は毛利壹岐守
 ハ春川の陣を取居たりくるは朝鮮勢と合せ押寄る
 と聞えし由は毛利の士卒は向ひ爰よりハ一武畧と運ら
 りるは我陣營より十町計は前面は能く奸場は森木
 有けるは勢を分け伏兵と設けたる案の如く朝鮮勢押来
 り彼の森と左に見て馳せ通り毛利勢と挑し戦はるは斯

て軍半かるは伏兵一度は起し立陣と造り朝鮮勢の後より
 打ち掛り前後より取圍み一人も餘さずと攻戦ふ朝鮮
 勢前後は敵とけ途を失ひ一度は墮と崩れ立只としく
 と叫び合ひ算を乱し四方へ逃げ奔る日本勢ハ敵の立つ
 所もなく敗走するは小乗の備を乱しまはるは掛けは追
 打數百人討取りけるは毛利が勢一戦は勝利を得思ひのま
 ま郡縣は火と放し妨し威を示しける
 朝鮮 江原道の助防將元豪ハ敵軍と龜尾浦より撃ちつれ
 と穢りたるは此時敵の大陣忠州及び原州は在り營と
 連ねて京都は續きたる其忠州は在る者ハ路と竹山陽智